

Title	口繪説明
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.1 (1929. 3) ,p.159- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290300-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

口 繪 説 明

メリ東洋語學校のマンエ語教授であり、エイモニエ氏と共に著て「チャム語字書」を出し、その他「チャムに關する新研究」(單行本)、「印度支那に關する西葡文史料」(アジア協會雜誌、殖民史雜誌等所載)等の著者として知られてゐるカバトン(Cabaton)氏は、印度支那についての歴文史料の一大集成の出版を企圖し、孜々として懲むなく材料蒐集中であつたが、今より約十數年前ローマを遠からざるサンティ・カラントのフランシスコ派修道院の文書探訪中偶然日本古文書の一束を發見し、その一つを撮影し日本研究の一青年學者にその研究を委嘱した。然るに此青年は世界大戰に從軍して戦死し、次いでカバトン氏は、此手紙の寫眞を東洋語學校の日本語教授ドートルメル氏に託し讀破せんことを依頼した。氏は之を佛譯し、一九二六年の後半期の (*Revue d'histoire franciscaine*) (フランシスコ派史雜誌) に「一六〇三年日本基督教徒のローマに送りし手紙」と題して發表した(註1)。本號の口繪は、此拔刷より複製せしものである。左に武田勝藏氏の特に本誌のため不鮮明な寫眞より讀破せられし所をかくぐ。

以羅良太おさんちたてに
奉撫恩札右の一通は、日本
都にて、さんふらんしそこの御
門流を駆走仕、かづくの

「チャム語字書」を出し、その他「チャムに關する新研究」(單行本)、「印度支那に關する西葡文史料」(Asia Association Magazine, Colonial History Magazine etc.) 等の著者として知られてゐるカバトン(Cabaton)氏は、印度支那についての歴文史料の一大集成の出版を企圖し、孜々として懲むなく材料蒐集中であつたが、今より約十數年前ローマを遠からざるサンティ・カラントのフランシスコ派修道院の文書探訪中偶然日本古文書の一束を發見し、その一つを撮影し日本研究の一青年學者にその研究を委嘱した。然るに此青年は世界大戰に從軍して戦死し、次いでカバトン氏は、此手紙の寫眞を東洋語學校の日本語教授ドートルメル氏に託し讀破せんことを依頼した。氏は之を佛譯し、一九二六年の後半期の (*Revue d'histoire franciscaine*) (フランシスコ派史雜誌) に「一六〇三年日本基督教徒のローマに送りし手紙」と題して發表した(註1)。本號の口繪は、此拔刷より複製せしものである。左に武田勝藏氏の特に本誌のため不鮮明な寫眞より讀破せられし所をかくぐ。

以羅良太おさんちたてに
奉撫恩札右の一通は、日本
都にて、さんふらんしそこの御
門流を駆走仕、かづくの

きりしたん、不省憚、謹而言
上仕、委趣、御主せすきり
しと御出世以來千五百九十
六年めにさんふらんしそこの
伴天連六人、同日本人廿人、
まるちりに御なり候、其時の
日本のあるじの名をば大閣と
申候、然るに彼伴天連ふらい
平とろ、はうちいした、よき御
作業、よき御鏡を以て、

御主の御法をひろめ給へば
いよ／＼ゑけれしや繁昌い
たしもろ／＼のせんちよ教

人きりしたんになり候へば大閣被
聞召、我がきらいの法をひろむ
る間、成敗仕る旨を被仰出、
則伴天連六人、同日本人廿
人相そへからめとり、樓者
となし、翌八日日本京の辻？
左の耳をそぎ、車八リやう

にて□／＼? を渡し、廿六人の
人々はいよ／＼悦を以て、さん
だるをうたい、せんちよに御
談義なされ候へば見る人目を

驚しきく者耳なすます□

□□奉行の者共も、あきれ

たる體にて御座候、其時車

さきに、もたせられ候制札の

書付伴天連門戸の事、

先年かたく御停止被成候

處に、此伴天連呂宋より

夫とかうし令渡海、我きらい

の法をひろむる間、門戸に

成り候者共、廿人相そへ、みせ

しめのため、長崎において

はた物にのせ可申候と書付候、

此ふだの面を見、もろくの

きりしたん、傍々あにたの悅の

ふだかなと、各いさみ申候、

明れば大坂堺を渡し、

長崎においてはた物にか

け申候、是を見きく人々眞に

御あるじせず、きりしとのひ

いてすに對し、御命を擧

給ふ事よき御鏡、よき談

議かなと、おもひとり、ころび

のきりしたんは、立あがり、よは

きはつよくなり、つよき義?

又善をかされ、かゝるまるちり

……望□□きり

したんは？御座なく□□□□

廿六人の人々まるちりに御

なり候御士はおがみ申べきと

存候へど？我等の伴天連□□

は、まだはつはさまより御

ゆるしなく候へば？おがむ事を

□□□被仰？□□□□

もろくのきりしたんまる

ちりの眞を見付かほどまで

忠節を盡し、てうすに

對し、一命をはだし給ふ人？

……貴まぬ事をかなしみ

なげきて御詫言を申あげ

たてまつる、あはれまるちり

衆をおがむやうに御ゆる

しかくだされ、こよみにも

御いれなされ、一世かいに

ひろまり万民のまへにて、

とりおこなはせらるゝやうに

と？望み奉り候、其子細は

此御さだめ御座候はば、日本

まるちりのしゆの、御はまれの?

見ききあぢわふにおいては

いかなる悪人もひいては

く罷成り以來さまたげ御座候共

たれか、いてうすに對し、命をお

しむ人御座あるべきや、是大なる

きりしたんたあてのたよりに

罷成ると存候、一は

はつばさまの御息災をのぞみ

又は我等以下のくりきのために

てうずを奉頬いつもおらちよ

仕候

御出世以來千六百

慶長八年

十二月廿五日

狩野源助

平渡路

成川清六

清壽安

小川彌右衛門尉

辨道羅

池上與右衛門尉

聲明

眞山一雲

壽安

堀田無安
平渡路

秋田

老慶

霧岡了雲

免長留

御手洗清安
えすてあん

鈴木藤七
路連祇?

池上勝左衛門尉

横尾七右衛門尉

壽安

理安

以上はいふまでもなくフランシスカン派の教儀を京都に於て宣教しつゝありたる教徒が慶長八年ローマ教會に向つて送附したる請願書であり、一五九七年長崎で殉教した廿六人の切支丹を崇めん許可を時の法王に請ふたものである。ピートルメル氏は「以雅良太おさんちた」をもつて「聖教會」の意なるべしとし、以雅良太をもつて教會を意味する葡語の訳れるもの、さんちたは Santidad わは日本語の御なるべしと註してゐる。伴天連が葡語 Pedre ふらいが Fra 平とら、はうちいしたは Pedre, Batista 両名の名、ひいては フアン語 fides なるべく、五十三行以下寫真原文讀めざる所まわり、ピートルメル氏は次の如く譯してゐる。「……かゝるマル

チリ(殉教者)を見てその路に従ふを望むる キリスト教徒あらざ
らめと全ての人思ひはぐり候、これらの殉教者あがむぐしと存じ
候べども、吾等の師父(註11)はまだ法王様より御許しなく候へば
おがむことを得ぬと仰せられ、吾々は、まだ此人達に對する尊敬
を表現なし得ず候。もろ～のキリストンはかほどまで忠節を盡
し、主に命を捧げたる殉教者を拜み得ぬを悲みなげきて御願ひ奉
る所々。」

なほ洗禮名にハビエルタル氏の考證次の如し。平渡路
Padro 清壽安 San Juan 辨通羅 Benaventura の略か? 登明
Thome 壽安 Juan 稔國 Recque 免與留 Michael ベナベンツ
Esteban 路標誠 Rorengo 駿安 Léon

註1 J. Dautremer, Une adresse à Rome par les
chrétiens japonais en 1603.

註11 此所ニ氏の誤譯あり、原文に従ひ訂正す。

(松本信廣)